平成十九年八月、ミリオンセラーを記録したテノール歌手、秋川雅史さんが歌う『千の風になって』の一節である。米国先住民の伝承、あるいは一九三〇年代に作られたとされる詠み人知らずの外国の詩に、作家の新井満さんが日本語詞を書き、作曲したとされるが、この曲が百万枚を超えるほどヒットするという現象は、興味深い。

なぜなら、「私は墓にいない」という表現は、日本人が共有してきた仏教的な死生観とは明らかに異なるからだ。

日本の伝統的な弔いとは対極にある散骨は、今後、日本人の死生観にどのような影響を与えていくのか。

「最期まで『もう一度海に行きたい』と話していた主人の願いをかなえられたことには感謝しています」

平成八年一月に五十二歳の若さで死去した漫才師、横山やすしさんの遺骨をモーターボート仲間の勧めで瀬戸内海に撒いた妻の木村啓子さん（五九）はそう話す一方で、正直な気持ちを吐露する。

「主人は勝手気ままな人間に見られますが、考え方は昔かたぎの堅物で、散骨なんて思いもよらんかったでしょう。だから、大部分の遺骨は墓地にきちんと納めました。さびしがり屋な人ですから、いくらボート好きでも海の中では怒り出します。わたしの中では、あの人は海にはいない。墓地にしかいません」

墓地　「父は満開の桜とともに蘇る」

《葬儀は質素に。墓地も無用である。海の見える六甲山上と沖縄の金武湾、中城湾、ヤブチ島周辺に散骨を希望する》

父の遺言書が見つかったのは死後三カ月を経た平成十七年暮れのことだった。すでに、兵庫県尼崎市に住む長男の長浜勝彦さん（五九）は、残された母親や妹とともに葬儀を済ませていた。派手にしたつもりはなく、結果的には故人の遺志が生かせたと思ったが、問題は散骨だった。

八十五歳で亡くなった父は沖縄の生まれで関西に墓はなかった。長浜さんが納骨を考えていたのは京都・嵯峨野にある浄土宗の西寿寺という尼寺だった。桜の木などのそばに遺骨を埋める「庭園墓地」。以前にインターネットで見つけたときから気になっていた。

「遺言には、沖縄の地図も同封され、該当の海岸には丸印もつけられていました。故人の遺志を尊重すべきか、それとも残された私たちの意思を通すべきか悩みました」

結局、長浜さんは十八年五月、一人で沖縄へ向かった。父のふるさとは、真っ青な海が一面に広がっていた。遺言には葬儀の際、「お経の代わりに沖縄民謡を流してほしい」との記述もあり、来てよかったと思った。

だが、骨粉にした遺骨を思い切り海に撒いた瞬間、われに返った。言いしれぬさびしさに襲われ、慌てて骨壷のふたを閉めた。

「海を相手に投げても何も残らないことに気づいた。母にとってもお参りする場所すらない。父を思い出す対象が絶対に必要だと思った」

そして、その年の秋、西寿寺の門をたたいた。

改めて問う。「死」とは死者の問題だろうか、それともこの世に残された生者の問題だろうか。肉体的には当然本人のものだが、残された人は、死者の思い出を一生抱えて生きていかねばならない。

西寿寺の村井定心住職（五〇）は女性ならではの感性で、新しい葬送のあり方を考えて

きた。その一つの答えが「庭園墓地」だった。

京の町が一望できる境内には、季節の花に彩られた百二十坪ほどの遺骨を埋める庭と、桜の木を植えた「桜葬墓地」があり、木々の下には計五十人ほどが眠っている。

いずれも墓石はなく、場所は生前の本人や遺族の希望で決める。土に解ける容器に入れて埋めるため、遺骨はいずれ自然に還（かえ）る。目印には「竜のひげ」と呼ばれる枯れない常緑の植物を植える。

村井住職は言う。

「死者は、この世からはいなくなるけど、魂は必ずよみがえる。墓地はその再生を、生きている人が身近に感じるべき場所であり、生きている人が元気になれる場所でないといけないと思います」

西寿寺では容器の中に特殊な触媒を混ぜて遺骨を土に還りやすくしているという。火葬場の高温で焼いた骨はセラミック化しており、自然と同化しないという説もあるからだ。

海などへの散骨にしても、結局は「魚のえさになる」と話す研究者もいる。

父親を「桜葬」に埋葬した長浜さんは言う。

「父は骨になり、土になり、満開の桜となって私たちの前によみがえってくれる。ここへ

来れば違う生命になった父に会える気がする」

葬送をめぐって少なからぬ遺族が思い悩むのは、墓地を買う経済的な問題だけではない。檀家や戒名といった旧来の「葬式仏教」に釈然としない思いを抱く人も多い。

大阪市天王寺区にある浄土宗大蓮寺の秋田光彦住職（五一）は平成十四年から、亡くなる前に自分の墓地を買う生前個人墓を始めた。過去の宗派は問わず、檀家になる必要もない。自身の意思で「生前会員」になった人々だけが集う墓の集合体だ。

きっかけは阪神大震災だった。現地入りして行った葬儀のボランティア。テントに長机とパイプいすだけの簡素な場所に次々と骨壷が運ばれた。読経は一人わずか十五分ほど。それでも遺族は、見ず知らずの僧侶に対して「これで安心してあの世に送れる」と涙を流して喜んだという。

「それ以前の葬儀がいかに社会的儀礼でしかなかったか、改めて気づいた。生前墓はまだ新しい考え方だが、自身だけでなく、家族間でも死についての議論が生まれるきっかけになればと思う」

会員になると、境内に高さ四十センチほどの直方体の生前墓と、事前に仏教的な教義を

受けた上で戒名が与えられ、生前の医療やホスピス、葬儀などの相談にも乗る。費用は、これに永代供養権も含まれて一人八十八万円。すでに約五十人が入会した。

西寿寺でも檀家になる必要はなく、納骨費用などに十三万五千円がかかるだけで永代供養料などはいらない。いずれも死者の生きた証しを残した上で、生者からの経済的な自立を図った「個人完結型」の墓といえる。

秋田住職は「病や老いなど人間の弱さと向き合い、最期をどう迎えるかを共に考えることも宗教の役割ではないか」とした上で、こう指摘した。

「死は亡くなった人のものであり、残された人のものだ。そして寺の本来の役割は、生者と死者をつなぐ場所であるべきなのです」

葬儀　命の尊さ伝える最高の場

白いユリや紫色のカトレアをあしらった小さな祭壇には、孫の幼稚園で撮った故人お気に入りの写真が遺影として飾られ、両脇の「親族一同」という供花だけが目立っていた。